

お祖母ちゃんと同居

こうして祖母と朝食を食べることに慣れてきた。最初は緊張気味だったが、打ち解けるにつれて、会話も増えていき、気を遣わずに接することができるようになった。

二之部克之にのべかつゆきは勤めていた会社で社内不倫をしてしまったことがばれて、いきなり埼玉支社に左遷されることになってしまったのだ。

二十四歳の彼は、先輩社員の友田小百合と付き合っていることが会社にばれてしまった。小百合は克之の二歳年上だった。その彼女は結婚してい

て家庭を持っている女だったのだ。

幸い彼女の夫にはばれずに慰謝料を請求されることはなかったが、その代わり会社にばれてしまった。

結果的には小百合の旦那にばれる前に会社に知れてしまったという感じだった。もう少し長く交際を続けていたら、いつかは旦那にばれていたのかもしれない。それを思うと、会社に先にばれて良かったのだ。彼はそう思っていた。

それにしてもなぜ会社に知れてしまったのだろう。克之はそれが不思議だった。それを恐れて慎重に付き合っていたのだが、どうして会社にばれてしまったのか、まったく分からない。想像するにやはり社員に見つかって、それで会社に告発されたのだろう。それがいちばん有力な見方だった。

左遷されるまでは営業職だったが、左遷先では倉庫係だった。営業とは

天と地の差だ。倉庫係というのは、会社で役に立たない人間の吹き溜まりのような所で、底辺の部署とされていた。体のいい解雇の状態だ。要するに自分から辞めるように仕向けるのだ。

彼もそこへの異動を命ぜられたとき、辞めようかという考えは頭の中で揺らいだ。もう会社にはいられない。

だがしかし、そのあとどうするのかという身の振り方は頭になかった。他の職場に再就職というのも大変な気がしたのだ。ハローワークに出入りするのにも情けない気がしたし、親にも余計な心配をかけたくなかった。

もちろん家族には不倫して左遷されたなどとは口が裂けても言えない。普通に「埼玉支社に転勤になった」とだけ伝えた。

それを聞いたとき両親はびっくりしていたが、どうしようもなかった。

「じゃあ、お祖母ちゃんの家から会社に通ったら？」

と提案してくれたのは母だった。